

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	高橋 諒
主 論 文 題 名： 『うつほ物語』の本文と生成 研究編			
<p>(内容の要旨)</p> <p>平安時代中期に成立した『うつほ物語』は、戦後間もなく始められた本格的な研究において、本文および成立上の諸問題が剔抉された。だが、主要な問題にいま統一の見解も見いだされておらず、注釈や研究を進めていくうえで混乱が生ずる要因になってきた。現在もこうした問題は等閑視され、本文の問題を解決しないまま立ち入った作品論を展開するという状況にある。しかしながら、それは本来あるべき平安時代の作り物語の様相と乖離しており、戦後に提起された本文・成立・構想などの残された主要な問題に今一度立ちかえり、考究していくことが求められる。</p> <p>本論文は、上記の見地から、『うつほ物語』の注釈および研究に必要不可欠な、本文と成立に関する問題について、考察したものである。</p> <p>本論文は二部八章から構成される。以下、各部各章の梗概を示す。</p> <p>第一部「本文の形成」の主たる論点は、現存諸本がどのような本文か、どのような性質を有するか、という本文系統やその距離、伝本の位置づけに主眼を置いて論究した。個別の本文系統や伝本に焦点をあてることによって、『うつほ物語』本文の総体を把握することを目的とする。以下、四章からなる。</p> <p>第一章「諸本論再考—前田本系統の位置づけをめぐって—」では、現行の活字本・注釈書において善本と見なされ、底本として採用される前田家十三行本（以下、前田本）およびその本文系統について考察した。従来、禁裏本の流れを汲むとされてきた前田本であるが、その伝来を裏付ける徴証として、その箱書の記述が挙げられる。他の本文系統には明確な来歴を示すものはなく、それが前田本を善本とする所以の一つであった。</p> <p>箱書の記述の真偽も含めて、前田本系統それ自体の検討がなされてこなかった。箱書を端緒に、中世後期の古記録や源氏物語古注釈書、近世初期の蔵書目録類といった外部資料にあたることで、前田本系統の本文の源流を検証した。その結果、前田本系統は『禁裏御蔵書目録』に記載される失われた二三冊本から派生したものであること、また、従来の四系統の共通祖本に比定すべきことが明らかになった。そして、現存する四系統の本文は、すべての巻で異同が生じていることから、禁裏の蔵書となって目録に記載された後、系統を分かったことを推定した。共通祖本を具体的に想定することが可能になっ</p>			

たことで、本文の復元という観点から、前田本系に限らず四系統の本文を等しく検討すべきであると述べた。

第二章「歌集としての『風葉和歌集』と、その『うつほ物語』本文」では、諸本論において考察の対象になっている『風葉和歌集』およびその本文を取り上げ、その性格を検討した。従来、無批判に当該歌集と現存諸本の本文が比較され、その影響関係が指摘されてきたが、その当否も含めて、当該歌集を中心に撰歌意識や編集意図、本文の改変といった事例を検討することによって、現存諸本と本文の比較をする問題点や、系統の派生を考える基準とする難点について言及した。具体的には、『風葉和歌集』と現存物語とを比較対照することで、撰歌意識・編集意図・物語本文の相違といった段階ごとに、物語との差異があることが明らかになった。撰歌意識という観点では、撰者は物語の内容を把握せずとも『風葉和歌集』の読者が理解できる場面から採歌している。このことは撰者が物語に精通していなければなしえない。

また、編集意図という観点では、撰者は部立の配列やそれに沿う内容に詞書を改めている例が散見されることから、歌集としての意識をもって編集していることが知られる。したがって、従来のような部立・詞書・和歌から散逸物語の内容を推し量ろうとする研究方法の見直しが図られる。最後に、物語本文との相違という観点では、両者の異同は、歌集と散文の違いによるところが大きいことが判明した。鎌倉時代の写本が現存しない物語にとっては、その時代の本文を伝えているように思われるが、『風葉和歌集』自体も、伝本が江戸時代を遡るものではなく、成立上の問題も多く存在する。それゆえ、『風葉和歌集』の成立年代のみに従って、現存『風葉和歌集』の本文と現存『うつほ物語』本文との間に影響関係を見出すことは難しいことを指摘した。

第三章「浜田本と前田本系統の交渉—静嘉堂文庫蔵紀氏本の本文—」では、従来の本文研究において、「古態をとどめている」「古い性質を有する」などとされてきた静嘉堂文庫蔵紀氏本（以下、紀氏本）を例にとって、二種類の本文を校合することで新たな本文が形成された過程を明らかにした。該本は前田本系統および浜田本系統の中間に位置する本文を有しているとされており、そのことが「古態」の謂いを得た要因である。ただし、紀氏本による奥書には、「ふちはらの君」以下の一九巻は宝永七（一七一〇）年九月五日から二九日に至る間に他本によって校合された旨記されており、古い性質を有する本文であるのか疑問が持たれるため、その検証も行った。俊蔭巻の奥書から該本は俊蔭巻が前田本系本文で、他一九巻が浜田本系本文であることが知られる。したがって、本章では、前田本系の伝本数本と、本論文の資料編Ⅰ～Ⅲの「『うつほ物語』四系統本文集成」を用いて、該本と比較対照して、本文の様態を検討した。その結果、校合のさいに、浜田本において脱落している前田本系本文を補入によって書き入れ、浜田系本文との異同に異本注記を付していたことが判明した。対校に用いる前田本系本文は、御所本のような一部の巻を浜田本系で補写した取り合わせ本の一種で、浜田本を校合した結

果、生成された本文が該本のものであることも明らかになった。したがって、本文上、従来指摘されているような「古態」をとどめてはおらず、むしろ新たな異本を生み出したと言える。禁裏本から端を発して派生した四系統が、江戸時代中期には校合を経て新たな本文を形成していた一端を示している。

第四章「木曾本系統の特質」では、これまで校訂本文とされ、顧みられてこなかった木曾本系統の特性を論じるものである。以下、二節からなる。

第一節「『かやくき物語』の生成—木曾本系統の伝流—」では、「かやくき物語」と外題を付された新出の写本について、それが『うつほ物語』の一部であることを指摘し、書誌調査や伝本分類などの基礎的報告とともに、別名の物語に仕立てられた方法やその理由を検討した。『かやくき物語』の系統やその本文の性格は詳らかではなかったが、調査の結果、伝本には一〇行本と一五行本があり、一〇行本を親本に書写したのが一五行本であることがわかった。本文は、『うつほ物語』木曾本系統の朱引箇所を取り除いて、整定していることが判明した。注記は、木曾本系統の諸本のそれが墨書、『かやくき物語』の生成後に付された注記が朱書になっている。墨書は大半が宛字および振り仮名で、朱書の大半は異本注記である。本文および注記のあり方から、木曾本系伝本をもとに、『かやくき物語』が作られたと推定できる。

第二節「『こまの物語』の生成—享受の様相—」では、伝本調査が未整理であった「こまの物語」という写本を対象にして、「かやくき物語」と異なる散逸物語の名を借りて別物語へと作り変えられる享受の様相に主眼を置いて考察した。そして、「かやくき物語」および「こまの物語」が『うつほ物語』木曾本系統の特性と密接に関わることに言及した。「こまの物語」と題される写本は木曾本系伝本の吹上上巻をもとにして別物語に仕立てたものである。そのさい、編者・書写者・読者は、『こまの物語』が『うつほ物語』であると互いに理解しながら、別物語として生成・享受したと推測される。ただし、大名家の姫君など嫁入本として受け取った読者の場合は、『うつほ物語』の一部とは分からなかった可能性がある。『うつほ物語』のある巻に別の名を付して流布させることが、『うつほ物語』における享受のあり方の一つとして江戸時代にあったことを指摘した。

以上は、木曾本系統の伝本を別物語へと改めた、二つの事例である。その本文系統を利用した理由としては、他の本文系統と比べて、写本自体には巻序がなく、外題に巻名しか記載されていないことが挙げられる。その上、成立過程上、『うつほ物語』は巻ごとの独立性が高い作品であるから、特に吹上上巻や楼の上上下下巻など、他巻の内容と関わりのない巻が選定されたと推定した。

第二部「生成と享受」では、生成当初『うつほ物語』がどのように作られて、どのように読まれたかといった点について、論点を絞って追究する。作り手側・読み手側、両者の見地に立って、物語の生成と享受の様相を明らかにすることが目的にある。以下、四章からなる。

第一章「仲忠の主人公性は何か」では、『うつほ物語』の主人公がなぜ仲忠であると言えるのか、平安時代における作り物語の主人公を参照しつつ、その理由を検討した。従来自明なことのように思われている「主人公」を、平安時代の作り物語に即して、その性質を明らかにすることを目的とした。その結果、「主人公」には読み手とだけ共有している情報があり、他の作中人物はそれを持たないことが判明した。主人公とは、こうした読み手とともに秘事を保持する存在として位置付けられている。俊蔭一族の秘曲伝授の物語と、あて宮求婚譚・立太子争いを中心とした源正頼家の物語、この二系統の物語が混在することが従来言われてきた。それぞれの主人公に仲忠・あて宮が考えられてきたが、上記の主人公像から仲忠が主人公であり、『うつほ物語』は琴の伝承によって栄華を極めんとする点に物語の根幹があることにも言及した。

第二章「内侍のかみ／初秋巻をどう読むか」では、他巻と内容が矛盾し、一卷だけ孤立した巻である内侍のかみ巻（別称・初秋巻）を対象に、成立論を参照しつつ、当時どのような順番で読まれるべきであったかについて、検討を加えた。『うつほ物語』の注釈書を作る上では避けては通れない問題として位置づけられる。内侍のかみ巻が、物語の設定上、《あて宮・沖つ白波・蔵開・国譲》とは明らかに異なるグループに属するものであるため、現行の順序では読めない。したがって、国譲下巻の後に読まれるべく成立した可能性を指摘した。内侍のかみ巻を国譲下巻の後に位置づけて読むことによって、藤原の君巻から始発するあて宮求婚譚の終結（あて宮・沖つ白波巻）および立太子争い（国譲三巻）という、一連の源正頼家に関連する物語を一貫して理解することができる。一方で、内侍のかみ巻と楼の上上下下巻が続くことによって、弾琴によって一族の栄華が極められんとする俊蔭一族の秘琴に関わる物語を把握できるようになることを指摘した。

第三章「国譲巻における一の上と、撰関の不在—作り物語の歴史認識—」では、撰関全盛の時代でありながら、『うつほ物語』には一切撰関が描かれない点について検討を加えた。作り物語における撰関のあり方と関わらせ、物語に働く論理とともに、その歴史認識を明らかにした。国譲三巻において、藤原氏方に「一の上」の存在が強調され、撰関の不在が描かれている点を指摘し、その理由の一つには、立太子争いが源氏・藤原氏どちらに転ぶかわからない、そのような状況を演出するためであった点を明らかにした。また、立太子後、藤原氏方が「一の人」となり、源氏方が関白職にあるとおぼしい記述は、従来の指摘にある政治の協調体制や安定を描出するためではなく、立太子の後もなお、権力が均

衡状態にある両氏のあり方を描くためのものであったことを推察した。

第四章「作り物語の人物設定」では、長編の作り物語における、人物設定の変更について、『うつほ物語』『源氏物語』に見える事例をもとに、分析した。以下、二節からなる。

第一節「楼の上巻の変容一涼の子を中心に一」では、仲忠の好敵手たる源涼の子が性別を男から女へと転じている点について、検討を加えた。涼の子が蔵開・国譲巻では男であったのが楼の上巻で女に変わったとする従來說に異を唱えたものである。仮に涼には子が一人しかおらず男から女へと設定が改められたと見る場合、仲忠と水をあげられた涼像や、その物語の筋は特段変わらず、構想の変更を見出しがたい。対して、本章で提示する説として、涼には子が二人いて後から女が生まれたという設定を追加したと考える場合、蔵開上巻から楼の上下巻まで、あらゆる面において、仲忠と決定的に懸隔のある涼の姿が描出される点を指摘した。他方それは、仲忠が理想的な人物であることも浮き彫りにさせていることにも言及した。

第二節「『源氏物語』東屋巻と浮舟巻のはざま一右近は二人か一」では、『源氏物語』東屋巻・浮舟巻に登場する右近という女房の設定について考察した。これまで提出されてきた右近一人説・二人説を検討した後、従来考えられてこなかった写本の特性という観点から、右近に関する叙述の矛盾は、作り手側の問題として捉えられることを指摘した。成立当初の『源氏物語』は、写本として流布するため、既に成立し流布した巻は書き直すことができない。したがって、変更したい設定や、付け足したい設定は、後の巻で書くしか方法がなかった。ゆえに、作り手が右近の設定を浮舟巻で浮舟に仕える乳母の娘と変更したために、矛盾が生じたことを明らかにした。当時の読者は、後から設定を変更したと捉えるために、現代の読者のように矛盾とは捉えなかったと考えられる。また、右近の設定が変更された理由として、東屋巻を書いた時点での構想と、浮舟巻以降の構想に変化があったことにも言及した。

以上、本論文では、近年の研究動向を反省し、最も根幹的な『うつほ物語』の本文および成立という問題を中心に考察を加えた。『うつほ物語』研究が錯綜し混迷した一因には、成立と本文の問題を極めて単純に考えてきた点大きい。今後は物語写本のありよう、物語享受のありように即して、本文・成立・構想などの問題を踏まえて、研究を進めていくことが求められる。

Thesis Abstract

No. **2**

As described above, the texts of *Utsuho monogatari* and the issues of its formation are indispensable in the study of classical literature. Solving these issues will pave the way for a full annotation of *Utsuho monogatari*, hence the relevance of this thesis.